

コロナ禍における中山間地域の祭りの継続性 —土佐町宮古野地区・宇陀市菟田野地区を例に—

研究代表者：宮井芳暢

共同研究者：黒澤歩美・佐伯 亮・堀尾奈々・松本啓佑
村井颯真・山村紀幸・鍵本あみる・佐藤 巧
畠中光季・道方咲帆・南野優斗・向井優大

- 第1章 研究の目的と背景
- 第2章 先行研究
- 第3章 研究対象について
- 第4章 事例①宮古野 宮古野虫送り
- 第5章 事例②菟田野 うたの秋祭り
- 第6章 結論と考察

第1章 研究の目的と背景

2020年、世界各国で新型コロナウイルス（COVID-19）が大流行し、多くの感染者・死者をだした。日本もまた例外ではなく、感染症対策の徹底や緊急事態宣言の発令によりコロナウイルスの感染拡大を防ぐことに努めているが、それでも完全に収束したとはいえず、依然として新型コロナウイルスの脅威に晒されており、私たちの日常生活において様々な影響が出ている。

その中でも、特に各地の祭りの相次ぐ中止は多くの注目を集めている。主に夏や秋を中心に開催され、私たちの日常生活に根付いている祭りが中止となったことは、私たちに対して、新型コロナウイルスが与える悪影響を非常にわかりやすく伝えた。産経新聞や朝日新聞といったメディアがインターネット記事を作成して取り上げていることから人々が注目していることがわかるだろう。また、それらの記事の中には、「コロナで失われる可能性が高い日本文化1位は祭りである（一般社団法人マツリズム2021）」という祭りに対する意識調査の結果や祭りの中止と同時に、今後祭りが続いていくのか、失われてしまうのではないかといった危機感を人々は抱いていることも取り上げられていた。これらの理由として、これまでも日本文化継承の問題として指摘されてきた少子高齢化による担い手不足や、地域コミュニティの希薄化といった問題が深刻化していることが挙げられ、祭りにおいても同様の問題が指摘されている。

日本には数十万もの祭りがあると言われ、それぞれが地域ごとの個性を持ち、ユネスコ無形文化遺産に登録、国指定重要無形民俗文化財に指定されているように、大切に伝承されてきた。しかし、2020年から2021年の間に祭りの規模に関わらず、ほとんどが開催中止となっている。コロナがいつ収束するのか先が見通せないため、次に祭りが開催できる時期や、そもそも開催が可能になるのかわからない状況である。特に、中山間地域では人口減少が著しく、担い手不足などの問題が深刻化しており、地域の祭りは存続の危機に瀕し

ていると考えられる。

本研究はコロナ禍で中止となった中山間地域の祭りを対象に、祭りの継続性について調査するものである。第2章では先行研究から祭りの抱える諸問題について紹介し、第3章では調査地の詳細について、第4章と第5章では地域住民への聞き取り調査からこれまで祭りが続いてきた要件と、コロナ禍による祭りへの影響について述べる。第6章ではコロナを乗り越えて祭りを継続する可能性について祭りの今後の展望をまとめる。以上より地域の祭りの継続性を明らかにすることを本研究の目的とする。

第2章 先行研究

コロナ禍以前から祭りは減少しており、その原因として担い手不足や資金不足、次世代への継承意識の希薄化などが挙げられる。特に、担い手不足は少子高齢化により人口減少が著しい日本において避けることが出来ない問題として重要視され、祭りが継続するか否かの議論の核として考えられている。よって、先行研究は担い手不足に注目して触れていく。

担い手不足の解消のために地域は様々な対応をとっている。集落区単位で執り行われてきた祭りをより広域の町単位へと広げ、より大きな組織である町内会へと包摂したことで祭りの形態を変えても祭りそのものは存続している事例がある(卯田・阿部, 2015)。また、大学生やボランティア、地域マネージャーの外部サポートを地域外から呼び込み、運営に携わってもらうことで人手不足を解消した事例も報告されている(藤本他 2010)。一方、学生は入れ替わるため継続的な参加は難しいだろう。こうした連携は、継続が不安定で単発的なもので終わってしまう可能性がある。

山下・岩佐は農学者としての立場から、「農山漁村地域で継承される伝統的な祭事は、保全すべき重要な価値として国際的に認められている」(山下・岩佐, 2019, p382) ことを明らかにして、地域外部から人材を招くことに対する住民側の意識に注目し、石川県七尾市の熊甲二十日祭を例として研究を行った。祭りの担い手不足を解決するために地域外部から若年層を招くことに半数強の割合の住民が否定的であり、その理由としては技量不足により旧来の型を厳格に継承していくことができないことにあるとしている(山下・岩佐, 2019)。また、堂下は文化人類学者としての立場から「外部者参加によって民俗行事が文化的価値を損なうことなく継承していけるのか」(堂下, 2010, p72) に注目して、山下・岩佐と同じく熊甲二十日祭、加えて虫送りを例として研究を行った。担い手不足が深刻であるため、伝統を守ることもいかに人手を確保して行事を継続するかという問題に視線が向きがちだが、地域外部から人手を確保することで行事の伝統や雰囲気が変わることに対する是非を検討する必要があるとしている(堂下, 2010)。この指摘より、担い手不足の解決策そのものが問題を孕んでおり、地域外部からただ人を集めるだけでは解決できないことがわかる。

祭りの担い手不足という致命的な課題はコロナ禍が落ち着いても払拭されるわけではない。本論文では、コロナ禍により一時中断した祭りが再度復活し、継続的に行われていくのか、続いていくなれば避けられないこうした課題にどのように地域は向き合っていくのかについて述べる。地域の祭り、特に外部から客を集め地域経済の活性化を図る世俗的な「イベント化」(小松, 1997) した祭りではなく、過疎化が進む中山間地域の住民の交流や地域への愛着やアイデンティティを育むことを目的とした、自分たちのために行う祭りに焦

点を当てて本研究を進めていく。

第3章 研究対象について

研究場所を高知県土佐郡土佐町、奈良県宇陀市の二箇所にて定め、それぞれで聞き取り調査を行った。その中でも土佐町においては宮古野地区、宇陀市においては菟田野地区に着目し、研究を進めることとした。以後、宮古野地区は宮古野、菟田野地区は菟田野と記載する。

土佐町は四国の中央部に位置する、周囲を山林が占める地域である。町内の面積は212.13km²であり、国勢調査によると人口は2020年段階で3753人となっている。なお、高齢化率は全国平均の約28%に対し土佐町では約48%と非常に高い数値を残していた。その中でも宮古野は人口47人程度の地区である。

宇陀市は奈良県北東部、大和高原の南端に位置する、周囲を山林が占める高原地帯であり247.50km²の面積を有している。平地は市街地となっているが、山地や狭隘地に集落が点在する形となっており、今回着目した菟田野においては中山間地に属している。また、2020年段階で宇陀市の人口は28,121人であり、高齢化率はこちらも約41.98%と全国平均に比べて非常に高い。なお、菟田野の人口は2020年段階で3522人となっている。

以上より宮古野と菟田野には人口の差や都道府県の違いなどはあるものの、同じ中山間地域であり、高齢化率が全国平均に比べ高くなっていることがわかる。そのためどちらの地域においても祭りを取り行うためには担い手不足などといった難点が多い。しかし本調査をするにあたって事前に地域住民から調査を行ったところ、どちらの地域においても祭りを継続する意思が垣間見えた。同じ高齢化が進む中山間地域として共通項が多い宮古野、菟田野の事例から、高齢化率が高く数々の問題点に直面しているにも関わらずその中で何故祭りは継続して行われてきたのか、またコロナ禍が過ぎ去った後も続いていくのか、それぞれの地域から事例を調査する。

第4章 事例①宮古野 宮古野虫送り

土佐町宮古野地区では、毎年虫送りという怨霊から稲を守るための祭りが行われている。虫送りは全国的に開催されており、地域毎に特色のある日本に古くから根ざしている祭りである。今回の研究では特に宮古野地区の虫送りについて研究を行った。

虫送りとは日本の伝統文化の1つであり、一説には平安時代に齋藤別当実盛という武士が敵と戦闘中、馬が稲に足を取られて落ち、その隙を相手に突かれて戦死したことが起源であると言われ、その無念から作物を荒らす害虫として現れるようになったという。虫送りでは皆で歩く事で、齋藤別当実盛の怨霊である害虫を西へ西へと追い払い作物の豊穰を祈ることを目的としている。

宮古野では毎年6月20日に虫送りが開催されている。外部からの見学者も含めると100人を超える人々が参加する。住民達は大きな草履を担ぎ、ほら貝を吹き、太鼓を鳴らしながら地域の端から端までを練り歩く。地域の端まで怨霊を送ると隣の地域へ祭りの引継ぎが行われ、また隣の地域でも虫送りの儀式が行われる。草履は毎年手作りされており、祭りの後は神社に祀られるようである。使用される道具にはそれぞれ意味があり、大きい草履を作るのはそれだけ大きい男がいる事を示しており怨霊を警告している。また、ほら貝

や太鼓は音で怨霊を追い出すために使用されている。虫送りの日には仕事や学校を休みにする。また草履の大きさを地域で競うこともあったようである。儀式の後は公民館に集まり女性達が用意した食事で宴会をし、チョンガリ節という民俗舞踊の披露や、景品付きの相撲大会も行うなど地域住民の交流が行われている。

虫送りの継続性について考察すると、宮古野では全国の祭りと同じように担い手問題を抱えている。特に自分たちの作物の豊穰を祈る祭りであるという特質から、その地域の人々によって祭りが執り行われてきており、先行文献のように開催地域を広域化する取り組みや、地域外から担い手を募集することなどの対策をとることが難しいことから地域の人人口減少に合わせて祭りは衰退していくと言える。今後祭りを継続するとすれば、やはり担い手は解決しなければならないポイントである。

祭りをを行う目的として、虫送りにはコミュニティの維持を行うという意味があり、人々の交流を促すことに大きく貢献している。農業においては特に共同作業をするという性質があるため、隣近所にどういった人がいるのかを深く理解しておく必要がある。宮古野の場合、主に高知市内から虫送りを撮影しに来るカメラマンをもてなす。もちろん、五穀豊穰を願い、伝統を次の世代に受け継ごうという意志はあっただろうが、古くから虫送りが続いてきた最も大きな要因は、“交流を楽しむ”という明確な理由があったからだと考えられる。

地域の様子は時代によって変化する。虫送りは地元住民だけだったのが外からも見学者が来るようになった。また、専業農家が中心とはいえ農家でない人も参加する事から、地域住民の虫送りに対する熱意は大きいと考えられる。このように、地域内で強い基盤があり、なおかつ外からも注目を集める状態なのだ。カメラマンをもてなす事からも、人々の共に祭りを盛り上げたいという意志が見える。外からの見学者が来る事でよりやろうという思いが募る可能性はある。コロナ禍が明け、メディアでとりあげられるようになったり、地域住民が情報発信をしたりする事で見学者が増えれば、盛り上がる事は間違いないだろう。そうすれば、楽しい祭りがある地元に残ろう、あるいは虫送りの時期には帰ろうという住民が増えて、担い手不足が抑えられるだろう。外から来た人の注目度が高まって祭りが盛り上がり、地元愛を持つ地域住民が増える事によって、虫送りは存続していくのではないか。

第5章 事例②菟田野 うたの秋祭り

宇陀市菟田野地区では、毎年10月に宇太水分神社で住民100人以上が参加する大規模な祭りが開催されている。現在はコロナによって開催中止とされているなかで、うたの秋祭りの今後の継続性について調査を行った。

うたの秋祭りとは宇陀市菟田野で毎年10月の第三日曜日に開催されている祭りである。宇太水分神社の速秋津彦命(男性の神様)に惣社宇太水分神社速秋津姫命(女性の神様)が御渡されるための祭りであり、1200年あまりの歴史がある。神輿を中心に毛槍、花籠、神輿太鼓などを従え、往復12キロの道のりを練り歩いた後、宇太水分神社の階段を駆け上がり、境内で1トンを超える太鼓台を円を描くように回す熱気のある祭りである。現在使用されている太鼓台は6台であり、過去には10台ほど担いでいたようである。一台につき数百人の男衆が交代しながら担いでおり、最近では女性も参加できるようになるなど、時代に合

わせて祭りの形を変化させているようである。

全国の祭りと同じように、現在うたの秋祭りはコロナの影響を受けて開催されていない。地域住民の話によると過去に祭りが開催されなかったのは2回であることが分かった。1つは天候を原因としたものである。大雨により、道が崩れ神輿が通れない状態になったため中止された。2つめは世間の自粛ムードによるものである。1988年に昭和天皇の容態悪化に伴う自粛ムードにより、お祭りなど浮ついた行動を慎むために中止とされたようである。以上のことからこれまで開催中止とされたのは外的要因によるものであり、また中止されたとしてもその後変わらず祭りが復活していることが分かった。では現在コロナによって祭りが不開催となっていることを原因として、祭りが途絶えることはあるだろうか。この数年間に祭りが開催されていない理由は祭りをを行うことで感染拡大の原因となることを防ぐためであり、コロナという外的要因さえ無くなれば例年通りに祭りが開催されることが予測される。また地域住民への聞き取りから2年間開催できていなくとも祭りへのモチベーションを持ち続けていることを考えると、コロナ禍により祭りが開催できなくなったことが原因で祭りが途絶えるという可能性は低いのではないだろうか。コロナが祭りに与える影響は一時的な開催停止であり、祭りの継続性には影響しないことが予測される。

うたの秋祭りの継続性については、祭りの開催には地域住民のコミュニケーションや担い手、資金が必要であることが分かっており、これからの日本の状態を考えると人口減少や少子高齢化問題は避けられないことからすべての項目を満たすのは難しい。特に都市部の祭りに比べると中山間地域における問題は深刻であると言える。菟田野地区においても先行研究の事例のように担い手問題や資金不足の問題を抱えており、対策として地区外から神輿の担ぎ手の募集や、隣の地区と協力、神輿や太鼓台の修理費として補助金を利用しており、また地域で寄付金を募ることで祭りを存続させようとしている。祭りには様々な問題があるなかで、なぜ人々は存続させようとするのだろうか。

今回の調査では祭りのなかで行われる踊りや、祭り自体に文化的価値があり継承されている側面と、地域住民の仲間と交流したいという思いの2つの側面があることが分かった。しかし実際に人々に求められていることは、文化的価値やその継承という形式的なこともよりも、仲間との交流であることが読み取れた。祭りに参加するとは儀式を通じて同じ過程を踏むことであり、祭りは人々が共通の経験によって仲間になるための儀式ともいえる。祭りが開催される目的は仲間としての一体感を持つためであり、また仲間と酒を飲み交わしたい、交流したいからであると言えるのではないだろうか。

今後の継続性としては神輿の数は最盛期の10台から6台に減少し、規模を縮小していることや、女の子が参加できるようになった等、時代に合わせて形態を変化させていることが分かった。このことから今後菟田野地区の人口が減少したとしても開催形式を変えることで祭りは継続されていくことが示唆される。しかしあえて明るい展望を示すとすれば、コロナによって2年間祭りを開催できていないことやそれ以外にも人が集まるようなイベントを開催できていないことから地域住民は交流不足に陥っており、フラストレーションが高まっていることが予測される。以前より祭りを開催することへの関心が高まり、担い手問題が解消されるほど多くの人々が祭りに参加したいと考えているのではないだろうか。コロナ明けこそ祭りが再び活発化する最高の機会である。

第6章 結論と考察

本研究の目的はコロナ禍において祭りが開催中止とされていることに注目し、地域の祭りの継続性について明らかにすることである。第1章ではコロナ禍によって祭りが開催できなくなったことを取り上げる新聞記事から祭りの継続性が危ぶまれていることを知り、特に中山間地域において人口減少が進んでいることに注目して調査の対象とすることを述べた。第2章では祭り継続の問題の中でも特に担い手不足について各自治体の取り組みや問題など様々な事例を取り上げている。祭りを開催する地域の広域化や外部から大学生やボランティアを担い手として受け入れている事例や、そのことに対して地域住民が否定的な意識をもっていることを紹介しており、担い手問題の解決が難しいことを示した。第3章では事例として取り上げる土佐町宮古野地区と宇陀市菟田野地区の紹介を行った。第4章、第5章では現地調査を行った宮古野の「虫送り」と菟田野の「うたの秋祭り」の調査結果を述べる。今回2つの地域の祭りを調査したところ、先行研究ですでに明らかにされていた担い手不足や他の原因である金銭的な問題が内在していることが分かったが、それ以外にも多くのことが語られた。聞き取りを行った地域住民は担い手不足や金銭的な問題は祭りの存続に関わる問題として認識されており、特に担い手不足に対しては先行研究で述べられているように地域外から担ぎ手を募集していたり、かつては伝統から男子しか担げなかった神輿を女子も参加できるようにしたりと工夫をしているようだった。しかしそれらの問題の解決に向けて行動する一方、どこか楽観的な認識をしているようであった。

今回の調査から新たに得られたことは皆「宴会がしたいから祭りをを行う」という共通の回答をしたという事実である。これは言葉通りただ宴会がしたいということでもあるが、地域の人々と酒を酌み交わしたい、仲間と集まりたい、つまり「交流がしたい」ということであると結論付けた。祭りをを行うことで地域の人々は同じ過程を踏むことになり、同じ経験をした人々は仲間となる。飲み会はこの世で永久に変わらないイベントであるとも言え、仲間と交流がしたいために祭りが開催されていると言えるのではないだろうか。さらに交流を続けることにより地域コミュニティの結びつきを強めることになり地域自治に役立ち、また祭りは新しく地域に参入した人々がコミュニティの内側に入っていくやすくなるという効果もあるようだ。「交流がしたい」という想いはコロナ禍によって祭りが中止となっても消えることはなく、むしろ強まっていることが調査によって明らかになった。コロナ禍により神事のみ行うという対応を強いられている地域でも感染状況が落ち着けば、やがて交流としての面を復活させていくだろう。

本研究の目的である祭りの継続性について考えると「仲間と交流をしたい」という思いからこれまで祭りは続いてきた。そしてその思いは現在も変わらず、コロナ禍によって祭りが開催中止となっていることでより一層強くなっている。このことからコロナ禍以前より祭り自体が衰退の傾向にあったことや担い手不足や地元住民の高齢化など問題の解決が難しいことを忘れてはならないにしても、コロナが収束した後にはまた祭りが復活することが予想される。さらに言えば、交流がしたいという気持ちの高ぶりから担い手不足が解消する可能性さえある。これまで祭りに参加してこなかった人々もコロナ禍により2年間地域との関わりが絶たれており、以前より交流をしたいという思いが強まっている可能性がある。このことを考慮に入れるとコロナ禍以前よりも祭りがしたいという意識を持つ人は増えており、神輿の担ぎ手など人手不足が解消され、再び祭りは活発化するのではないだ

ろうか。今後、祭りの再興に注目すべきだろう。

謝辞

今回の研究において、土佐町の方や宇陀市の方に大変お世話になりました。感謝申し上げます。

引用・参考文献

- ・井口暁, 2019, 「過疎地域における祭りの終了と再生のメカニズム—三重県神川町の『桜祭り』から『桜覧会』への転換に注目して」『京都社会学年報』 KJS, 27, pp19-44
- ・一般社団法人マツリズム, 2021, 『祭に対する意識調査』の結果, 2022年1月23日取得, <https://www.nikkei.com/article/DGXMZO90744400Q5A820C1I00000/>
- ・卯田卓矢・阿部依子, 2015, 「過疎地域における祭礼の存続形態—佐久市望月地域の榊祭りを事例として」『地域研究年報』 37, pp33-59
- ・宇陀市, 2020, 「人口統計 (R2.3)」宇陀市ホームページ, 2022年1月23日取得, https://www.city.uda.nara.jp/shimin/shisei/toukei/jinkou/h31/r2_3.html
- ・小松和彦, 1997, 「神なき時代の祝祭空間」小松和彦編著『祭りとイベント』小学館, pp6-38
- ・地域医療情報システム, 2022, 「高知県 土佐町」地域医療情報システムホームページ, 2022年1月23日取得, <https://jmap.jp/cities/detail/city/29212>
- ・地域医療情報システム, 2022, 「奈良県 宇陀市」地域医療情報システムホームページ, 2022年1月23日取得, <https://jmap.jp/cities/detail/city/39363>
- ・堂下恵, 2010, 「民俗行事の特徴に合わせた保存・継承方法の検討—七尾市中島地区を事例として—」『地域課題研究ゼミナール支援事業成果報告概要』, pp72-77
- ・藤本穰彦・田中恭子・平石純, 2010, 「中山間地域の担い手不在問題」『総合政策論叢』第19号, pp67-81
- ・祭の日、宮古野虫送り, 2021年2月1日取得, 宮古野虫送り—2021年—[祭の日], matsuri-no-hi.com
- ・山下良平・岩佐拓弥, 2019, 「伝統的祭事における担い手多様化に関する住民意見の規定要因—重要無形民俗文化財・熊甲二十日祭を事例として—」『農村計画学会誌』 37巻4号, pp382-391
- ・ROIS-DS 人文学オープンデータ共同利用センター, 2022, 「高知県土佐郡土佐町宮古野」Geoshapeリポジトリ—地理形状データ共有サイト—, 2022年1月23日取得 <https://geoshape.ex.nii.ac.jp/ka/resource/39/393630140.html>
- ・一般社団法人奈良県ビジターズビューロー, あをによし奈良旅ネット〈奈良県観光公式サイト〉, 2021年1月31日取得, http://yamatoji.nara-kankou.or.jp/01shaji/01jinja/03east_area/udamikumarijinja-uda_utano/event/0000000002/
- ・平松真輝・川村凌太郎・浅田柊哉・布村彩乃, 2020 「日本の温泉地と入れ墨 (タトゥー) は共存できるか—城崎温泉の例に着目して—」『奈良県立大学研究報告』 12, pp126-130